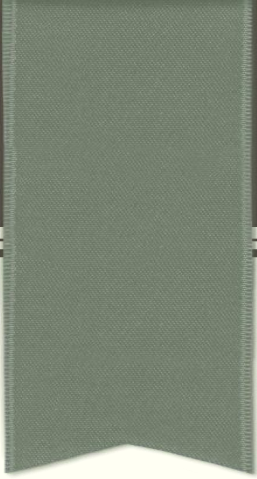


総合科学の基礎C 哲学・思想の基礎


第2回

担当教員：熊坂 元大

[kumasaka@tokushima-u.ac.jp]



ソクラテスとホッブズの 考えた自由



自由？

- 自由が尊重されるべきだという考えは、あたかも普遍的であるかのように感じがちだが、この考えは近代社会の産物
- 自由は尊重されるべきなのに、自由が侵害されることが不可避であるように感じられることも多いが、この矛盾も近代社会ならではのこと

自由？

- ここでいう近代とは、時代的な区分ではない
- 宗教や伝統的権威の地位低下→

世俗的な社会・人間中心主義の社会

- 哲学・思想辞典（岩波書店）では、暴力の国家への集中、均一的な税制の貫徹、官僚制の確立、政治の職業化、民主主義の拡大と貫徹、**個人主義と人権思想の拡大**などが、特徴として挙げられている

自由？

- 現代の日本人が論じる自由の概念は、明治期に西洋から輸入されたもの
- 哲学発祥の地が古代ギリシャ（希臘）なので、まずはその時代を振り返る
- ちなみに哲学という訳語が定着する以前は、『性理学』や『希臘哲学』と訳されていた

余談

- 馴染みのないヨーロッパの概念を日本語に翻訳するというのは、かなり大変
- たとえば、カント哲学の用語に「超越論的純粹理性」というものがあるが、当初は「卓絶極微純然靈知」などと訳されていた
- 言語を学ぶことは簡単ではないが、翻訳ではなく原語で読むほうがわかりやすいこともある
- 外国語をしっかりと学びましょう

余談

- 名前の拳がったカントは非常に几帳面な性格で有名
- カントの散歩する時間に合わせて、町の人びとが時計のズレを直していたという逸話があるほど

余談

- philosophize 哲学する
- Kant can't
- 哲学するのをやめたいけれど、私はカントだ（からできない）
- 哲学的問題について考えるのをやめることができない、生真面目なカント

余談

- しかし哲学的関心と無縁でいられる人は、そうはいない
- 人間的理性の宿命（『純粹理性批判』第一版序文）
- カントをはじめとする、歴史に名を遺すような哲学者たちも、私たちと全く違う関心・性質の持ち主ではない



ソクラテスと自由



哲学が誕生した古代ギリシャ

- 古代ギリシャの都市国家では学問・思想が発展
- なかでもアテネは著名な哲学者を輩出

ソクラテス・プラトン・アリストテレス

- アテネは民主政を採用し、市民にはさまざまな権利が認められ、アテネの発展と共に自由を謳歌
- 古代アテネの自由と近代社会の自由は同じではない

哲学が誕生した古代ギリシャ

古代アテネの自由と近代的自由の2つの違い

1) 自由を享受するのは誰か

近代は誰もが自由、古代には**自由民**と**奴隷**の区別があった

2) 自由の優先度

個人の自由と**共同体の価値**の優先度が私たちの社会では入れ替わっている

ソクラテス (B.C.469?-B.C.399)

- 妻のクサンティッペは悪妻の代名詞
- 市民との哲学問答を行う
- 著作はなくプラトンがソクラテスを主役とする対話集を著した
- 「無知の知」

ソクラテス

- 知恵者とされる人物のもとへ赴き、人間にとって最も重要と思われる**真・善・美**について尋ね、相手の主張を内在的に破綻させる
- **産婆術**と言われる議論の仕方
- 対話相手自身の**ロゴス**（言葉・論理）を通じ、本人の主張とは異なる新たな知識を生み出させる
 - ソクラテス本人は新たな知識を出産しない
 - 他者の困難な出産・流産を助ける

ソクラテスの裁判

- 「国家の認める神々を認めず、他の新奇な神霊を持ち込む」「青年たちを墮落させる」という罪状で告発
- 罪状を否認するも501票のうち、281票が有罪
- その後の弁論で、改心することなく対話活動を続けると述べたことで陪審員の不興を買い、再投票の結果、361の有罪票で死刑が確定
- 自らの安全・生命のために逃亡することを望まず、脱獄の機会をあえて利用することなく刑死

※社会契約論の萌芽とも考えられる

ソクラテスの弁明

- アテネは巨大で気品ある軍馬だが、巨大であるがゆえに鈍く、覚醒のためには何か刺す者が必要であり、それこそが自分である
- アテネ市民を尊重してはいるが、それ以上に神を尊重し、神託に従って智慧を希求し続ける

ソクラテスの弁明

- 共同体の利益と宗教的権威を根拠とした弁明
- 自らの行為を個人の自由の名のもとに正当化せず
- ソクラテス個人の特殊な思想信条ではなく、当時の常識的な考え方にのっとなった弁明

『アンティゴネー』

ヘロドトス（歴史家）やペリクレス（政治家）の著述

古代アテネの自由

- どれだけ個人（市民）が自由を謳歌しているように見えても、共同体の利益のために自由を制限される
- 古代アテネでは、個人を非難することは容易だったが、アテネを非難することは稀
- 近代社会で国家や政府を非難することは極めて容易で、個人は法によって保護されている

古代アテネの自由

- 自由が評価されたのは、あくまでもそれが**共同体の繁栄（軍事的成功）**をもたらしたと考えられていたから
- 独裁政時代のアテネは他のポリスから抜きこんでた存在ではなかったが、民主政になって覇権をにぎるように
- 独裁者の命令で、独裁政権のために戦うよりも、自分の利益のために戦うほうがやる気がする

古代アテネの自由

- 個人の権利として大切だから守られていたのではなく、**アテネの偉大さの要因**として重要視されていた
- 社会あっての個人であり、個人より社会が優先
- 社会に先立つ、自由で平等な個人という考えは、近代の産物
- その最初期の思想家が**ホッブズ**（ただし市民個人よりも、むしろ政治権力寄りの思想との評価）



ホッブズの考えた自由

トマス・ホッブズ (1588-1679)

- 自称「恐怖との双生児」
- 徹底した**唯物論者**
- ものごとを観念や精神的側面からとらえるよりも、その根底にある素材を土台として重視する思想

『リヴァイアサン』

- この著作でホッブズは自由意思を否定（唯物論的・機械論的な人間観と国家観）
- 自由な諸個人が生み出す自然状態から、いかに国家が成立し正当化されるか、社会契約の形で論じた

ホッブズの考える自由

- ホッブズにとって、自由とは**外的障害の欠如**のこと
- 全ての出来事には原因があり必然的だが、私たちはその一部を自由だと評し、その他を自由ではないという
- 自由と不自由の差は原因が行為者の中にあるか否か
- 人間は**意志の通り**に**行為する**自由を持てる
- だが**意志の自由**はない
- なぜなら意志には外的原因があるから

ホッブズの考える自由

- 私たちは自分の行為について熟慮し、自由に決定すると考えている
- しかしホッブズによれば、熟慮 (deliberation) とは、そもそも自由 (liberty) を否定 (de-) すること
- 人は外的要因について熟慮するのであり、その結果は自由ではなく必然

ホップズの考える自由

- 人は、自分がどう振る舞うか考え、邪魔や障害がなければ、考えた通り、自由に振る舞うことができる（意志の通りに行為する自由）
- しかし私たちが意思決定するときに考慮するのは、外部にある対象（食べ物・寝床 etc.）や外部から受ける刺激（暖かい・寒い etc.）
- そうした外的な事柄を、自分にとって最善になるよう決定する → 自由ではないということに

ホッブズの考える自由

- 人間は感覚や欲求によって動く、機械やボールのような存在として、ホッブズは理解していた
- 彼にとって「自由な意志」は、「丸い四角」（矛盾した無意味な言葉）
- 欲求などによって突き動かされるまま、自由に振る舞う人間たちは、社会が成立する以前の**自然状態**でどのように振る舞うか

ホッブズの描く自然状態

- 意志通りに行為する自由を妨げる社会的規則や処罰がない
- 誰もが自分が関心を持つものの獲得を試みてよい
- 最大の関心は自己の安全を保つこと（自己保存）
- 自分の身をまもることは、基本中の基本の権利のように思われるが、ホッブズによると自己保存は権利ではない